

[講演要旨]

文禄五年閏七月十二日に豊後で大地震はなかったのか？

松崎伸一*(四国電力株), 日名子健二(郷土史研究家), 平井義人(日出町歴史資料館・日出町帆足萬里記念館)

§1. 豊後地震の震源モデル

豊後地震の発生日については、閏七月九日説と同十二日説がある。石橋(2018)は同時代史料に絞った考察を行い、「九日の19時頃に伊予～豊後に被害をもたらす大地震が発生して津波を生じ、薩摩でも強く揺れて京都も有感、十二日深夜に「伏見地震」が発生した」と述べた。そして石橋(2019)は、九日の19時頃に別府湾沖～伊予に震源域を持つ単一の伊予・豊後地震(長さ100km弱, Mj7.5強, Mw7.0)を提案した。川上断層は不活動としている。しかしながら、『広江之由来』(1657年成立)には西条市広江で大地震動し村宅が湮没して庶民が移住したという記録が残されている。『小松邑志』(1860年成立)でこの地震は閏七月九日とされている。石橋(2019)が示す震源モデルの東端である伊予市付近から広江までは約40kmであり、司・翠川(1999)で広江での最大加速度を推定すると200ガル弱となる。ディレクティブティ効果や地盤条件を勘案しても村宅が跡形もなくなるような被害が生じるとは考え難い。九日の地震では川上断層も活動したと考えた方がよいのではなかろうか。一方豊後では、由布院で山が崩壊し村人のほとんどが圧死したというフロイスの記録がある。震源モデルの西端は、別府湾で停止したのではなく陸域の由布院断層まで破壊したと考えた方が、大規模地すべりの説明が容易ではなかろうか。そうであるとする、中央構造線断層帯の石鎚山脈北縁西部区間(41km)～伊予灘区間(88km)～豊予海峡～由布院区間(61km)の全長190kmが一度に活動したのであろうか。石橋(2019)はMj7.5強と想定し川上断層を除外したが、本稿では、伊予灘から別府湾及び九州陸域にかけての活断層の分布形態(右ステップ等)からは一度期の活動の可能性は低いのではと考へ、石鎚～伊予灘区間と豊予～由布院区間との分割活動モデルを提案する。

石鎚～伊予灘区間の活動は、京都の記録などに記されている九日酉戌刻頃であろう。では豊予～由布院区間の活動はというと、別府湾の津波が午後7時頃であるため、九日と考えると石鎚～伊予灘区間とほぼ同じ時刻の活動となる。1時間以内の時間差での連動という可能性も考えられなくはないが、異なる時刻の地震発生を示唆する史料も豊後には存在することから九日以外で考へてみる。ここで着目したいのが、『南航日記残簡』:「九日。赴鹿兒島。乗船。午時著島。以幸侃付狀與伊集院本田六兵衛。地震微雨。(略)十二日。雨風不息。大地震。夜亦震。十三日。前度會下僧巡宗等來話。風雨。大地震。」である。この記述からは、九日の地震は伊予～豊後(石鎚～伊

予灘区間)の地震、十三日は伏見地震と考へるのが自然であろう。では十二日の大地震はどこで起きた地震だろうか？これを豊予～由布院区間の活動と考へてはどうだろうか。榎原・村田(2018)は十二日の南九州の地震を提案した。しかし、『玄与日記』の十二日の条には地震の記述はない。さらに玄与が供奉した近衛信尹の『三藐院記』にも地震の記述はない。南九州地震説は仮説の域を出ない。

§2. 検証

次に分割活動モデルで京都と鹿兒島の震度を検証する。特に、『残簡』で九日地震、十二日大地震(震度4以上)とされている点に着目する。1995年兵庫県南部地震(Mj7.3)の際に震度4以上が観測された範囲の半径は概ね200km程度であった。震度4以上の範囲とマグニチュードの関係を示す勝又(1971)の関係式において、Mj7.3の場合で円形領域を仮定すると、その半径は175km程度であり兵庫県南部地震と整合的である。Mj7.5だと210km程度である。そこで、伊予、豊後でMj7.5程度の地震が連続したと仮定して、断層から200kmの範囲で震度4が生じたと考えた図を示す。京都や鹿兒島での震度と概ね整合であり、さらに『残簡』で十二日の地震の方の揺れが大きいとされていることと合致する。

§3. おわりに

閏七月九日に伊予～豊後で大地震があったことについては石橋(2018)と同様の見解である。本稿は、九日の地震に加えて十二日も豊後で大きな地震があったと考へてはどうかと提案するものである。石橋(2018)は『残簡』の信頼性は低いと評価しているようであり、採用していないが、その根拠が明確ではない。同時代史料を否定するには十分な検証が必要であり、慎重な議論が必要ではなかろうか。

